

弥生時代を特徴づけるものとして、“鉄”と“魏志倭人伝”が挙げられます。しかし、魏志倭人伝には、鉄という文字はたった一字しかなく、矢じりの素材として登場しているに過ぎません。弥生時代の製鉄を倭人伝から読み取ることは難しいようです。

山陰に赴任したばかりの頃の友人は、記紀に描かれるオロチ伝説が、弥生時代の山陰地方の製鉄を象徴しているのではないかと漠然と考えていました。記紀には、“目は赤加賀智(あかかがち:ホオズキの意)のように真っ赤で、その腹は血にただれ”などと描かれていることから、ホオズキのように赤い目はタタラ製鉄に関わる人たちの炎を凝視する目をあらわし、血にただれた腹の記述は製鉄で燃え盛る炎や流れ出す鉄滓や炉のなかの溶けた鉄をあらわしていると。或いは砂鉄を取るために繰り返される鉄穴流しは、大量の土砂を下流に流すため、河川は埋没して川床が上がり、度々洪水を引き起こす暴れ川になり、その荒れ狂う河川の氾濫がオロチであり、多くの人命を奪う災厄の対象として捉えられていたことが反映されたと考えたからです。しかし、出雲で“たたら製鉄”がさかんになるのは、鎌倉時代になってからなので、周囲の人たちが“たたら製鉄”の様相を前述のごとく感じたとしても、それを8世紀の書物に書き記すことはタイムマシンでもないと不可能です。オロチ伝説は製鉄とは別の視点で洞察すべきでしょう。

製鉄の起源は遠くユーラシアの西方に由来しますが、銅の精錬所で発展した可能性が高いようです。融点が銅より極めて高い鉄ですが、銅製錬の現場で発生する大量の銅滓の中に、銑鉄の小鉄塊が含まれていました。その小鉄塊を取り出し、集めて、鍛造成形すれば鉄素材に生まれ変わらせることができたと思われれます。技能者は農作業を免除されて精錬に専従し、施設や道具も製鉄用に工夫する環境にあったので、技術を向上させることができたのでしょう。

列島では弥生時代後期に広島の小丸遺跡、熊本の下扇原遺跡や狩尾遺跡群などに製鉄遺構を伺わせる痕跡があるようです。また、強制的送風を伴わない“野だたら”と呼ばれるような痕跡も見つかるそうです。列島にも青銅器祭祀を支えた銅の精錬技術の蓄積がありましたから、製鉄の技術と知識を持つ人たち(渡来人)とともに実験的に試していたのではないのでしょうか。

鉄の生産には、技能者ばかりでなく、それを補佐する多くの労働者も必要です。彼らの生活を支えるにはさらに広範囲に組織立てられた集団とそれを統率するリーダーが必要です。一方で生産された鉄素材は大きな繁栄をもたらします。鉄の農具は、それまでの石や木の農具と比べて画期的な生産性を生み出すので、誰もが欲しがったはずで、そんな循環的な製鉄技術の開始は、技術の流入口であった北九州ではなく、材料の鉄鉱石が採取できる吉備地方だったようです。

鉄による繁栄は、社会の成熟度を高めるのにも貢献したと思います。複数の集落や集団と、広範囲の領域を統括する首長が誕生し、首長の墓を巨大に築造することで秩序を象徴する社会が登場してきます。他方で鉄の供給が不足して不満を大きくしていた地方もあったのでしょう。畿内地方はその不満を原動力とした武力で、鉄の流通と権益を掌握したようです。鉄の原料が鉄鉱石から砂鉄に変わること、生産の中心は吉備から出雲に移りますが、畿内による支配はそのままだったようです。

ところで、倭人伝は上役を忖度してだいぶ誇張されたようですが、倭のライバルとされたのは世界史にも登場するクシャン王朝(大月氏国)です。前漢では匈奴の侵入に悩まされていたため、月氏と共同で匈奴を撃つべく、武帝の時代に張騫を使者として派遣しましたが、援助は得られなかったようです。時は流れ3世紀になると、今度はササン朝の侵入を受けたクシャン朝が、魏に救援?の使者を送ったのですが、朝貢として西域担当将軍の曹真の手柄とされただけのようです。

漢書巻61 張騫李廣利伝第31に『大月氏王已為胡所殺、立其夫人為王。(其の夫人を立てて王と為す)』と書かれています。張騫が大月氏国にたどり着いた時の大月氏王は先代王の夫人で、女王?であったらしいのです。陳素さんも知っていたでしょうから、倭に遣わした使者に女王的人物の存在を調べさせたのかも知れません。当時の九州には今でも沖縄などに残る女性齋主(ノロ)に似た、巫女を中心とするシャーマニズムの集団が組織され、信仰する山の入り口(=山門)で神のお告げで民を導いていました。辿々しい通訳の問いに対して、巫女の長を女王と伝えてしまったのではないのでしょうか。なぜなら、倭人各国の半数の副官が“卑奴母離”だなんて、尋ねた人と答えた人の認識が一致していたとは思えません。



ノロの図: 第二尚氏時代 東京国立博物館蔵